

第2回栄養管理研修会

(管理栄養士・栄養士研修会)

- 日時 平成29年12月6日(水) 10時～15時10分
- 会場 岡山県医師会館 401会議室
- 出席者 66病院75名・会員外2名
- 委員 8名出席

岡山済生会総合病院の藤岡真一先生に、近年変化してきている肝臓病の診断と治療法について、また大原記念倉敷中央医療機構の相田俊夫先生には経営からの多角的視点について、それぞれ講演いただいた。

講演

肝臓病の新たな診断と治療法 — 肝臓病は生活習慣病 —



講師
岡山済生会総合病院
藤岡 真一 診療部長
肝臓病センター長
超音波センター長

肝臓病の検査と治療は近年とても進歩してきている。最新の肝臓病検査では、造影MRI（プロモビストMRI）があり、6～7mmの肝がんの診断ができるようになってきていることや、糖鎖マーカーを用いた「MBPGI」では肝臓の線維化進展を血液検査で簡便に測定可能となっている。MBPGIの基準値はなく、数値の経過を見ていくことにより線維化進展がわかること、特にアルコール性

肝硬変で高い値を示し、禁酒により低下することを症例で説明された。

最新治療としては、平成26年9月からDirect Acting Antivirals（直接作用型抗ウイルス剤）の治療が開始となり、12週間の内服治療で90%を超える治療成績が上がっている。副作用も少なく、ほぼ全員が飲み切れる薬であるが、かなり高額な薬のため助成金を申請し使用している現状である。

肝細胞がんの治療では、手術・ラジオ波焼灼術（RFA）・カテーテル・抗がん剤・放射線治療がある。手術では開腹手術に比べ負担の少ない腹腔鏡手術が増加し、エコーで確認しながら肝がんを焼灼するラジオ波治療はチーム医療で行っていることを紹介された。

今後は、生活習慣病としての肝臓治療と、サルコペニア対策が課題となつてくると予想される。管理栄養士の出席であり、食事内容の確認や体成分分析を継続して行い、多職種連携で療養支援を行っていくことの重要性を示された。

調査報告

緊急時の給食支援に関する アンケート調査について

病院協会栄養管理委員会委員
河田病院
宇野 富美子 栄養管理科長

給食支援対策委員会の活動として本年8月に行つた緊急時の給食支援に関

するアンケート（回収率100%）調査の報告があった。平成27年の結果と大きな変化はなかったが、直営か委託、給食数や地理的な条件等で対応の差があり、人手不足も挙げられていた。今後も3年ごとにアンケート調査を行う予定である。

講演

病院経営からみた 管理栄養士・栄養士への期待



講師
公益財団法人大原記念
倉敷中央医療機構
相田 俊夫
代表理事副理事長

経営には衆知を集めた全員経営の意識が必要で、倉敷中央病院の同じボートに多職種が乗り荒波を進んでいる絵のSame Boat「私たち、みんな医療人」を紹介された。

財務基盤は使命達成のための源資で、経営イコールお金儲けではなく、使命に向かつて医療の提供を行い、使命と成果が結びついていることが重要である。家計簿や、栄養部門の収支状況、病院会計情報など数字の把握をし、改善へのアクションを行っているかを尋ねられた。「信頼の壺」は日頃の行動の総和であり、日常業務をきちんとすることにより壺が上向きになり、難しい仕事に貢献することにより壺の中に信頼が多く貯えられていくことを示された。

給食業務を委託するには、何のために委託するのかを明確にする必要がある。委託の成否の決め手には協働環境の構築や、病院の理念・基本方針の共有とそれに基づくSame Boat感覚の定着等が必要である。

安全はフードサービスの基礎であり、すべての要因が重なりエラーが起こるスライスモデルに示されるように、穴を埋めていくことが重要である。ヒューマンエラーは新人だけではなく熟練者もおこすこと、指差し呼称によりエラーが1/6に減少する効果があること、また危険予知トレーニング（KYT）を行い、安全先取りの職場作りに繋げていくことである。

栄養部門の必要能力は変化してきており、その能力開発には医療技術の進歩に対応した専門能力の深化と高度化、専門能力を顕在化できる社会的スキルの獲得、生涯にわたる能力形成システムなどがあり、心の知能指数（EQ）やコミュニケーション能力を意識的に勉強し、活用していくことが大切である。よりよい人間関係を築くには、ほめる・励ます・話をよく聴く・信頼するなど肯定的ストロークがよく、視点を変え対極の立場で見ることでも得られることも多い。

「心が変われば、行動が変わる。行動が変われば習慣が変わる。習慣が変われば性格が変わる。性格が変われば人生が変わる。すべて自分の心次第です」の言葉で講演は終了した。

(栄養管理委員 大原秋子)